

おがわはりつ  
小川破笠筆 「関羽図」

元文4年(1739) 軸装 一幅 絹本着色 本紙 縦84cm 横34.4cm

本作品は小川破笠晩年の画作の一つです。

小川破笠(寛文3年(1663)～延享4年(1747))は、若き日に松尾芭蕉の門人となり、榎本其角や服部嵐雪と深い親交を持ちました。破笠45歳の頃に2人が続けて亡くなり、嵐雪の追善句集に句を残して以降、破笠の足跡は一旦途絶えます。それから十数年後、破笠は細工物の職人という意外な形で再び登場しました。破笠が生み出した独特の細工物は破笠細工と呼ばれるようになります。破笠は享保8年(1723)6月21日、61歳の時に弘前藩5代藩主・津軽信寿の御伽役として召し抱えられました。その経緯は不明ですが、破笠が両国橋で器を並べ売っていたところ、通りかかった津軽侯がその出来栄を認め、津

軽家に召し抱えたという逸話が残っています。

本作品の主題である関羽は、三国志に登場する英傑の一人で、中国では関帝と呼ばれ、神としても信仰を集めています。黄檗宗では護法神として知られる存在です。右斜めを向いて立ち、手は右の拳を左手で包み込み、腹の前におろしています。右脇に抱えた青龍偃月刀や、切れ長の鋭い目つきで、五筋のひげを蓄える点は関羽の特徴を表しています。描線は全体に謹直で固さが残ります。画人としての破笠は英一蝶に習ったとも言われますが、一蝶のような洒脱さは見られず、画家として非常にこなれているような印象ではありません。一蝶は其角の友人であったことから、そうした中で知り合った同業者とみる方が妥当と言えそうです。一方で着衣の文様は精緻に描き込まれ、巾幘の金刺繍や武具の金具は金が盛り上げられるなど工夫が見られます。工人・破笠らしい見事な意匠を楽しむことができる作品です。

本作品の関羽は青龍偃月刀を持った姿で描かれていますが、これは正史ではなく『三国志演義』(以下『演義』)の記述に基づくものです。日本では元禄4年(1691)湖南文山が『演義』を訳した『通俗三国志』が刊行されて以降、本格的に広まっています。享保年間に中国文物への関心が高まった後、特に宝暦・明和年間以降になると、市井にも『演義』の内容が浸透していきました。こうした中で、明代の末期から清代の初め頃に描かれ日本に伝来した関羽像も広まり、国内で盛んに描かれ始めたと言われます。日本に伝来した関羽像と本作品は、関羽の容貌や服装、持物など、基本的な造形は一致していますが、『演義』に登場する従者・周倉や赤兎馬が描かれない点、ポーズや着衣の文様などはこれらと異なります。本作品は、江戸時代に伝来した関羽像が本格的に浸透していく中で、比較的早い時期に描かれた作品です。津軽信寿は幅広く文武を修めた趣味人で、また黄檗宗系の寺院とも交流がありました。信寿という後援者を得た破笠は当時最新の中国文物に触れていた可能性が指摘されています。また破笠自身も文芸の世界と交流を持っていたことから、早くに『演義』や関羽像に何かしらの形で触れていたと考えられます。そうした中に本作品のような図像があった可能性もありますが、関羽は青龍偃月刀の柄を握っておらず、右脇に立てて抱えるやや不自然な形をとっていることから、むしろ他の図像を関羽に転用して、青龍偃月刀を持たせたようにも見えます。いずれにせよ、関羽像の日本での受容・拡大期の作例として貴重です。

(齋藤 明日美)



小川破笠筆 「関羽図」

## 主要参考文献

灰野 昭郎『日本の美術 No.389 小川破笠—江戸工芸の粋』(至文堂 平成10年(1998))

長尾 直茂『江戸時代の絵画における関羽像の確立』(『漢文学 解釋與研究』第二輯 漢文学研究会 平成11年(1999))

小林 祐子『研究資料 小川破笠と「弘前藩廳日記」(破笠研究ノート)』(『國華』1259号 朝日新聞出版 平成12年(2000))